

下野市立祇園小学校

1 学校課題

主体的に学び、よく考えて課題解決ができる児童の育成
～国語科・理科を中心に、書くことを通して～

2 研究計画

今年度は、「主体的な学び」と「思考力・判断力・表現力の育成」を図るために、昨年度に引き続き国語科や理科を中心に研究を進め、より進化させていくことを目指す。児童が主体的・協働的に学べるような学習活動を展開すること、「書くこと」を通してよく考え、思考に深まりをもたせることについて研究を進める。また、評価についても、評価規準の設定や評価方法について研究を深める。

(1) 主体的に学ぶ子どもの育成 ～学習展開の工夫～

児童が、主体的に課題意識をもって学習に取り組んでいくために、問題解決的な学習活動を取り入れた授業を実践する。

- ② 自力解決のための時間と場を設定し、自分なりの考えをもたせるような指導展開をする。
- ② 児童が必要感や自己有用感をもてるような学習活動を工夫する。
- ③ 「考えの交流」を通して、思考の深まりや広がりが見られるような指導展開を工夫する。
- ④ 学習の主体者としての自覚をもち、主体的・協働的に学習できるよう見通しをもった問題解決的な学習を構成し実践する。
- ⑤ 学習評価における観点「思考・判断・表現」において、評価規準や評価方法の妥当性・信頼性について検証を図る。

(2) よく考えて課題を解決する子どもの育成 ～書くことを生かす～

- ① 国語科や理科における「書くこと」の語句や語彙力を、児童一人一人が確実に習得できるよう指導を工夫する。
- ② 思考力・判断力・表現力等を高めるために、課題に対して自分の考えをもち、筋道を立てて考えを書く活動を取り入れ、個々の考えをより確かなものにしていく。
- ③ 予想と観察・実験の結果を対比させて考えさせたり、結果とまとめを区別して書かせたり、といった「書く」時間を十分確保した授業を展開する。



3 研究内容

研究は、職員を3つの部に分けて取り組んだ。

(1) 授業研究部

- ① 低・中・高学年ブロックごとに国語・理科・道徳を振り分け、研究授業を柱として研究を進めた。教材研究・指導案検討をブロックごとに進めるとともに、外部アドバイザーの参加を依頼し、指導・助言を受けた。

【授業研究会】

ブロック	学年	日程	単元名	外部アドバイザー
国語科 (低学年)	2年	7月3日	こんなもの、見つけたよ	八巻修教諭(宇都宮大学附属小) 稲葉亜希恵指導主事(市教委)
理科 (高学年)	5年	11月15日	ふりこのきまり	人見久城教授(宇都宮大学) 田澤孝一指導主事(市教委)
道徳科 (中学年)	4年	10月16日	心を結ぶ一本のロープ	谷仲俊彦指導主事(総合教育センター)
生活単元 (特別支援)	つくし	12月6日	お楽しみ会をしよう	校内研究会のため依頼なし

- ② 授業研究会の形を、今年度からパネルディスカッションの形式に変更した。授業者、外部アドバイザーをパネラーとして、授業に関する様々な話題で議論を深めた。
- ③ 授業研究会以外にも、教員間で授業を見合う機会を設けた。11月を授業公開月間として、学校課題の研究教科に関わらず、様々な授業実践を公開し、互いの授業を見合う活動を行った。その際、授業を見る視点をまとめた「授業観察用シート」(【図1】参照)を作成し、活用を図った。



(2) 調査研究部

児童の関心や学習状況等の調査研究を行う。その結果を分析し、授業研究に生かせるよう課題を提示する。課題を基に、改善プランを立て、授業実践を行う。

- ① 「祇園小思考力に関するアンケート」を5月と12月の2回実施し、児童の実態や変容の様子を捉え、授業改善に活用するよう促した。

(3) 評価研究部

国語科・理科において、普段の授業で使える評価方法を検証し、提案する。実践内容を持ち寄り、改善プランを立て、再度授業実践を行う。

- ① 国語科では、自分が考えたメモが友達のアドバイスによって、さらに詳しいメモに変容する過程が一目でわかるワークシートを作成した。
- ② 理科では、3つの実験結果や振り返りを一目で確認できる1枚ポートフォリオを作成することで、思考の流れの視覚化を図った。
- ③ 道徳では、道徳的価値の自覚の変容に気づかせる手立てとして、導入時と終末時の価値に対する考えを書き出せるワークシートを作成し、活用した。

授業観察用シート				
月	日	校時	年 組	授業者
教科名		単元名	参観者	
№	項目	観 点	チェック	
1	準備	授業の様子やノートの点検などから、児童一人一人の授業の理解度を把握し、個別の指導を行うことで学習の深めを促したり、意欲の向上への意欲や自信を高めるための手立てをたしている。		
2	導入	・前時の学習の流れを整理させたり、この後の活動への期待感を高めるための授業の導入の工夫を行っている。		
3	説明	・学習のねらいを明確(学習方法・評価方法・本時のゴール)にし、学習に意欲をかきたせている。		
4	発問①	・内容を整理・明確にするなど、児童に分かりやすい発問や指示を心がけている。		
5	発問②	・児童の主体的な思考を促す問いかけを取り入れている。		
6	板書	・学習活動や児童の思考の流れが確認できる板書であった。		
7	展開①	・児童が自分の考えをまとめたり、表現したりする時間を確保している。(一人学びの時間の確保)		
8	展開②	・ペア活動、グループでの話し合い、一斉による練習の場などを学習過程に位置付けている。(集団学習の時間の確保)		
9	展開③	・机間指導や補助発問、ヒントカードの活用などにより、児童の学習状況の把握や個別指導を行うとともに、個々の意見を意図的に取り上げ、集団の中で活かしている。		
10	終末	・児童が本時のねらいに即して、自らの学習を振り返る時間や活動を確保している。		
11	全体	・学習のきまりを厳格させ、学習に向き合わせている。		
12	全体	・児童の主体的・自発的な思考があり、一人一人が生きていき「互いのよきやよい」を認め合いながら学習に取り組む授業であった。		

【授業実践の視座】
 ① 学習内容(授業実践)と、上記の観点について、学習活動の中で実践することができたポイントに○をつける。異なる観点については、授業者の経験・知識などに沿って添えて添える。
 ② 参観後、児童実態と授業実践を対照させ、授業観察シートをもとに授業の振り返りを行う。
 ③ 授業者の意識の必要はない。
 ④ 授業観察シートは終了後、担当(担任)まで提出する。

【図1】 授業観察用シート

4 本年度の成果と課題

(1) 研究の成果

- ① 「めあて」と「振り返り」の時間の設定や工夫により、児童が学習の見通しをもち、理解の深まりを感じる活動の実践が見られた。また、一人学びの時間の設定により、自力解決の場が確保され、その後の集団での学びによる考えの交流を通して、思考の深まりや広がりにつながることができた。
- ② ノート指導やワークシートの工夫により、児童は自らの思考の流れを確認することができ、教師も児童の理解の様子を把握することができた。指導と評価の一体化を図ることができた。
- ③ 授業研究会におけるパネルディスカッションの導入により、授業者・外部アドバイザーと参観者との直接やりとりができ、多様な意見や考えを聞くことができた。
- ④ 授業観察用シートの活用により、授業参観の視点を明確にするとともに、自らの授業実践を振り返る際の視点とすることができた。



(2) 課題

- ① 研究を通して、児童は書くことへの苦手意識が薄れ、課題に対する自分の考えを書くことができるようになってきた。その反面、個人差が大きくなってきている現状も見られる。個人差に応じた課題提示の仕方や児童相互の学び合いの形など、個に応じた支援を考えることが重要である。
- ② 児童が「主体的に学ぶ」「よく考えて課題を解決する」姿とは具体的にどのようなものなのか、指導者側の認識が一致していない。「目指す児童像」をさらに具体化することで、学習における児童の様子をイメージできるようにすることが必要である。

